

月刊

2014

1  
月号

# みんぱく

馬

特集



人類社会の鏡としての馬 池谷和信

十二年後はヒノエウマ 板橋春夫

モンゴル競馬の醍醐味 小長谷有紀

天馬空を行く 山中由里子

午年には、やる気に拍車をかけて 平石典子

# 馬肉スキヤンダル

この文章を執筆している二月の時点で、日本における大ニュースの一つは大手ホテルや百貨店における料理の表示偽装の問題だが、一年ほど前にヨーロッパでも似たような「馬肉スキヤンダル」事件がニュースをさわがせていた。この事件は、食の安全の根幹に関わるというだけでなく、動物福祉や動物観に興味を持つ者にとっても興味深い点があった。

二〇一三年の一月にアイルランドの当局が、アイルランドとイギリスで牛ひき肉として売られていた冷凍ハンバーガーの中に、馬肉や豚肉が混入しているのをDNA検査で発見したと発表した（中には二九パーセントが馬肉だったバーガーもあった）。追加の調査の中で欧州諸国で馬肉の混入した製品が発見され、中には一〇〇パーセント馬肉の「牛肉」ラザニアなどもあった。混入の経路をたどるとフランスなど複数のEU諸国の食肉企業がからみ、それらの企業の食肉の輸入元も多様で、そうとう複雑な事件らしい。馬肉の出所としては、ルーマニアで馬に荷車を引かせてはならないという動物福祉の法律ができた結果、用済みになった馬が捨てられ、それが大量に食肉処分されて欧州諸国に出回ったという説がある。その他ポーランドから来た馬肉もあったとか、いくつか

## 伊勢田 哲治

プロフィール  
1968年福岡県生まれ。京都大学大学院文学研究科准教授。京都大学文学部卒業。文学研究科修士課程終了後渡米し、イギリスで学位取得。専門は科学と哲学・倫理学。主な著書に『疑似科学と科学の哲学』『認識論を社会化する』『動物からの倫理学入門』（以上名古屋大学出版会）、『哲学思考トレーニング』（ちくま新書）、『倫理的に考える』（勤草書房）などがある。

のルートが報道されているが、未だに全貌は明らかになっていないようである。

このスキヤンダルが単なる食の安全の問題にとどまらない大騒ぎになったのは、英米では馬肉食はタブーだからである。イギリス人ももちろん牛肉は食べるが、牛と違って馬はなじみの深い伴侶動物であり、犬とならんで賢い動物としての評判も確立しており、食べるなどもつての他だと多くの人が思っている。イギリスでは用途にかかわらずすべての馬がペット用のマイクロチップだけでなく個体確認のための「パスポート」を常に携帯することまで法律で決められていて、手のかけようは他の動物の比ではない。だからこそ、知らず知らず馬肉を食べてしまっていたということがイギリス人にとっては大変ショックなできごとだったのである。イギリスは世界の動物愛護・動物福祉運動を牽引してきた動物愛護先進国だが、そのイギリスなどの法制にルーマニアが無理にあわせようとした結果がまわりまわって馬肉スキヤンダルになったのだとすれば、何とも皮肉な話である。皮肉というだけでなく、動物の扱いのような文化や慣習の深く関わる問題を法律主導で変えようとすることの危険性についての教訓も読み取ることができるとは思えない。

## 月刊 みんなぱく

1月号目次

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/><b>馬肉スキヤンダル</b><br/>伊勢田 哲治</p> <p>2 <b>特集</b><br/><b>馬</b></p> <p>2 人類社会の鏡としての馬 池谷 和信</p> <p>4 十二年後はヒノエウマ 板橋 春夫</p> <p>6 モンゴル競馬の醍醐味 小長谷 有紀</p> <p>8 天馬空を行く——馬のファンタジー<br/>山中 由里子</p> <p>9 午年には、やる気に拍車をかけて——乗馬のススム<br/>平石 典子</p> <p>10 似たモノさがし<br/><b>信じてはいないけど……</b><br/>——身近なお守りたち 宇田川 妙子</p> <p>12 みんなぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行<br/><b>仮面と人形の待つ家——インドネシア・バリ島</b><br/>吉田 ゆか子</p> <p>16 多文化をあきなう<br/><b>心のなかの国境線をひき直す</b><br/>萱野 智篤</p> <p>18 フィールドで考える・退官寄稿<br/><b>手仕事によるモノづくりの現場にて</b><br/>吉本 忍</p> <p>20 人間学のキーワード<br/><b>物質性</b><br/>古谷 嘉章</p> <p>21 異聞逸聞<br/><b>「金網」に囲まれた島・沖縄の「音」</b><br/>呉屋 淳子</p> <p>22 制服の世界、世界の制服<br/><b>巫女への変心</b><br/>長坂 康代</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|



乗用、農耕、運搬、食用、あるいは競技に。有用な家畜として、馬と人とのつきあいは長い。神話や物語のなかでは、その脚力で天まで駆けのぼり、その馬力で天体さえも運ぶ。野を疾走し、障害を飛び越える馬のように、前進と飛躍の年となるよう、年始めは馬にまつわる特集をお届けしたい。



## 人類社会の鏡としての馬

池谷 和信いけやわづのぶ  
民博 民族社会研究部

### 馬の道を追う

世界的に著名な岩絵の残っているフランスのラスコー。今から一万五〇〇〇年も前の絵には動物が多く、馬の頻度も高くと高いといわれる。描かれた野生の馬は黒の輪郭のなかに茶色の模様。黒いたてがみがリアルである。槍のささった馬は狩猟場面を示し、馬の肉に依存した社会があったことを物語っている。当時の野生種は絶滅してしまったが、現存する家畜としての馬は、中央アジアの黒海からカスピ海にかけての地域が起源であるといわれる。その担い手は牧畜の民であり、そこから世界中に広まっていった。カザフスタンから極寒の地ヤクーティヤに至るまで、現在でも馬と人のかかわりは深い。牧夫が馬に付



ラスコーの岩絵のイメージ図。  
槍のささった馬

き添うことのない周年放牧がおこなわれ、乳は飲用やアルコール度の低い馬乳酒に、肉は食用だけではなく儀礼の際にも欠かせない。

その後、馬はモンゴル高原をとり、日本には古墳時代に朝鮮半島からもちこまれたとされる。五世紀には乗馬の習慣も広がっていたという。さらに、沖縄島の島々にも馬が運ばれていたことは、現在の宮古や与那国でみられる小型の馬からもうかがえる。農耕用であったとされるが、琉球王朝時代に中国に輸出されていた点なども興味深い。また、チベット高原では、近年まで中国雲南省で生産されたお茶が馬の背にのせられ運ばれるなど、馬は運搬用としても広い地域で利用されてきた。

### 馬のもつふたつのパワー

アフリカにも、馬が欠かせない地域がある。カラハリ砂漠には水が十分にはない。人にとって重要な水源である野生のスイカを、馬にも食べやすいように切って刻んでやるのは、狩猟のさいに重要な存在だからである。かつては、動物の足跡の状況から獲物の場所を推定して、弓や槍や犬を使って猟をしていた。馬の導入は狩猟革命といつてよいだろう。ハンターは、馬に乗り獲物を見つけるやいなや追いかける。そして、動物と馬との競争が始まる。ゲムズボック、エランド（両者とも、カモシカの仲間）、キリンといえど、馬の体力にまさる動物はいない。それらは、途中でばててしまい、立ち止まってしまう。ハンターは、容易に槍を獲物に命中させることができ。ただこのように何でも動物が獲れてしまうと、乱獲につながりやすい。

もうひとつは、西アフリカのフルベを中心とする王国社会のなかの馬である。馬をもつこと、馬に乗ることは社会のなかで一部に限定されていて、権威の象徴とされる。多数の馬を飼養しているわけではないが、インドや東南アジアの諸社会のなかにも類似した形がみられる。

### 現在に生きる馬

世界にはさまざまな動物がいるが、初期の人類の時代から現在まで、しかも寒冷地域から乾燥帯や熱帯に至るまで世界各地で人と深いつながりをもつとも長くもつてきたのは、馬ではないだろうか。馬は、肉や乳をベースにして、人や物の運搬、狩猟の助け、社会的な象徴、そして現在では、競馬や乗馬のような娯楽にも欠かせないものになっている。同時に、木曾馬のような日本の在来馬は絶滅の危機にあることを忘れてはならないであろう。一方で、昨年三月に沖縄本島で宮古馬を使った「琉球競馬」が復活したのは朗報である。これは、速さを競うものではない。走り方の美しさを競うものである。今後、馬と人のあらたなかわりが生まれることを期待したい。



上：馬の追跡によって疲れたゲムズボック。ハンターが槍をかまえる（カラハリ砂漠）  
右下：スイカを食べる馬（カラハリ砂漠）  
左下：日本で最後といわれる木材を運搬する馬（岩手県遠野市）



# 十二年後はヒノエウマ

いたばしはるお  
板橋 春夫 國學院大學兼任講師

何が回避されたのか

昭和四〇年（一九六五）は一八二万三六九七人。昭和四一年は一三六万九七四人。昭和四二年は一九三万五六七四人。この数字は出生数である。昭和四一年は前年より四六万人減少し、翌年は五七万人増加した。この数字は何か回避された結果である。昭和四一年にいったい何が起きたのか。

丙と午が重なる

私事であるが、二〇二四年の午年は、わたしの干支の甲午である。そして十二年後にヒノエウマがやってくる。西暦二〇二六年である。少し暦の知識を確認しておきたい。干支というのは、十干（甲乙丙丁戊己庚辛壬癸）と十二支（子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥）を組み合わせて六〇とおりとなる。組み合わせが振り出しに戻るから還暦である。十干は五行とよばれる木火土金水が基本で、この五つの要素は兄（え）と弟（と）に分割する。すなわち木の兄と木の弟、火の兄と火の弟という具合に一〇とおりとなる。

くだんの丙は火の兄であるから、当然火の性格を有する。そのために丙年に生まれた人は火が燃えるように威勢がよく、丙の年は火災が多いと伝承されてきた。一方、午は馬である。気性の激しい馬の連想から元気がよいイメージが付与された。じゃじゃ馬とか暴れ馬などのように午年生まれの女性には元気がよい、男まさりだといわれてきた。この丙と午のふたつが重なったヒノエウマの女性は夫を食い殺すとか火事を招くなど伝承された。その干支は六〇年に一回巡ってくる。

八百屋お七はヒノエウマ生まれ

江戸時代に八百屋お七の振り袖火事が知られる。天和元年（一六八八）暮れの火事で焼け出されたお七は避難先の寺で若侍と恋仲になり楽しい日々を過ごす。焼けた跡に家が再建し元に戻ってしまふ。お七は再び火事になれば若侍と一緒に過ごせると、会いたい一心で火付けをしてしまふ。そして火付け犯として市中引きまわしのうえ、火あぶりの刑に処せられた。お七は寛文六年（一六六六）のヒノエウマの生まれで思い詰める何をしでかすかわからない女性という印象を与えた。この事件は井原西鶴『好色五人女』に題材を提供し、浄瑠璃、歌舞伎などでも上演されてきた。

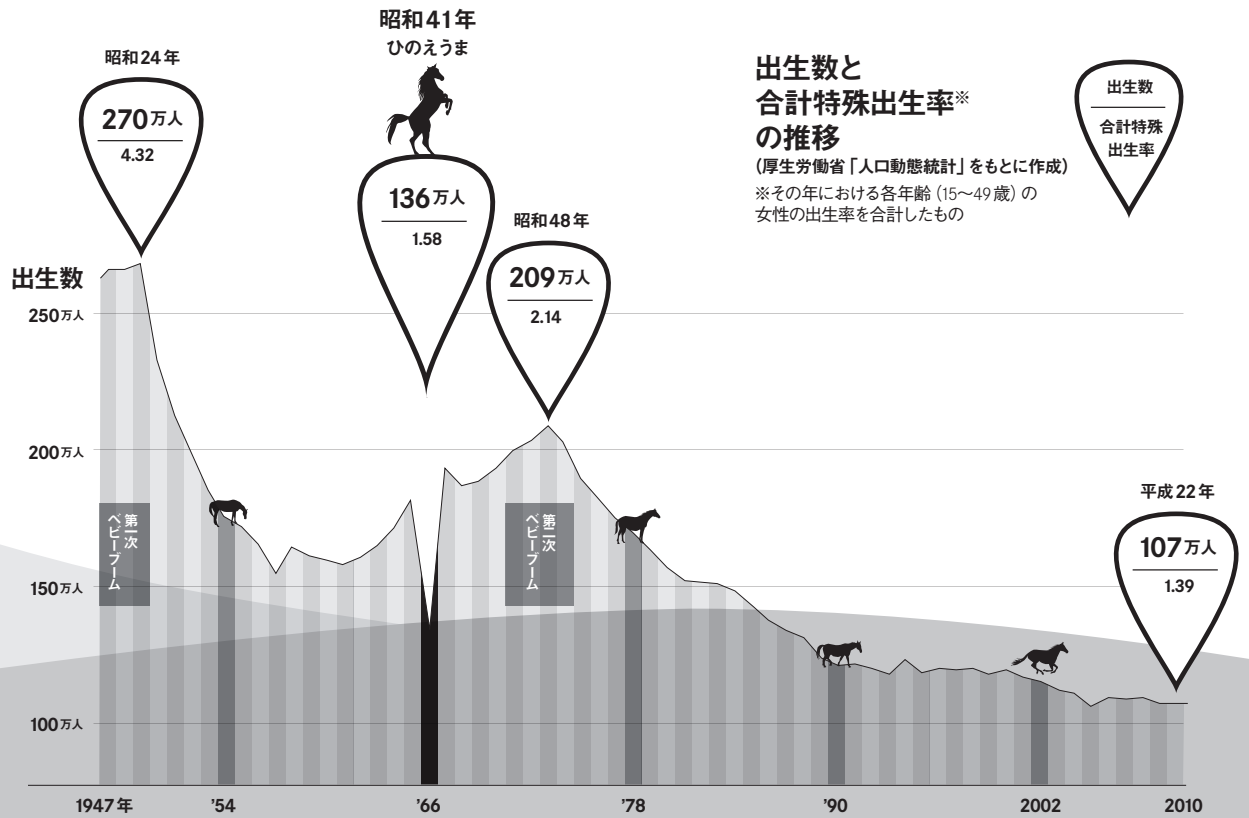
このように歴史上の伝説と深く結びつくことで、ヒノエウマの火に関する伝承が深められ広く流布していくことになっ



錦絵「ひのえうま歳生まれ子のおしる書」。  
蓬菜春升画。弘化（1844～48）頃。  
（国立歴史民俗博物館蔵）

## 出生数と合計特殊出生率の推移

（厚生労働省「人口動態統計」をもとに作成）  
※その年における各年齢（15～49歳）の女性の出生率を合計したもの



た。その後、ヒノエウマの女性は夫を食い殺すなどという俗信も付与されていった。その結果、江戸時代には人びとはヒノエウマを忌み嫌う傾向が強くなり、この年が近づくと、領主たちは間引きをしてはいけない、墮胎をしないようにと訴え続けた。裏を返せば、江戸時代を通じてヒノエウマ俗信を回避するために、多くのいのちが抹消され続けたのである。

### 出生数減少の要因

明治三九年（一九〇六）のヒノエウマは前年比五パーセント減であったが、昭和四一（一九六六）年のヒノエウマは前年比二六パーセントであった。現代に近いほうが結婚の時期をずらしたり、出産の時期をずらしてヒノエウマ出産を回避しようとしたのである。明治時代には墮胎や間引きがおこなわれた可能性は高いし、戸籍への登録も現代ほど厳密ではなく、秋から暮れに生まれた子であれば翌年生まれにしたであろうから、実際には五パーセントを超える数字であったと思う。高度経済成長期は科学技術が加速度的に進み、世の中は飛躍的に便利になっていった時代である。

昭和四一年のヒノエウマには、昔から悪いといわれることは回避しようとする世間並みの思考、受胎調節の知識・避妊技術の発展、少産化などの要素が複合的に重なり合った結果、四〇万人以上のいのちがこの世に誕生しなかった。ヒノエウマの驚異的な出生数減少は、世界的にも類を見ない現象であった。実際にあった過去の歴史は変えられないが、二度と繰り返さないことはできるはずである。いや本当にできるのだろうか。十二年後の二〇二六年における出産行動をこの目で確かめたい。



# モンゴル競馬の醍醐味

小長谷 有紀

民博 民族社会研究部



スタート直前

## 人馬一体のマラソン

モンゴル国の首都ウランバートルは人口一〇〇万人以上の大都会であり、ふだんはウマなど見かけない。しかし、年に一度、ウマの蹄の音が大地にひびきわたる日がある。ナーダムとよばれる夏の祭典である。七月二日は革命記念日で、スタジアムでの式典にはじまり、三日間かけて相撲や弓矢競技がおこなわれ、郊外では競馬がおこなわれる。

この競馬に参加する人たちは、遠方から自慢のウマをつれて調教をしながら移動してくる。昨今では、数日前にトラックでウマを運びこまれるようになった。こうした競馬参戦者にくわえて、近隣の人たちがこぞってウマに乗って観戦にくるから、大都会の周辺にウマが集結するのである。

競馬の騎手は子どもたちなので、ゴール付近にいと親たちの声援が聞こえてくる。「おい、ミニフー（わが子よ）、おまえのウマはまたつかれてないぞ」。そもそもモンゴル競馬の場合、何頭ものウマたちが次々と走りぬけてゆくという、ゴール風景はあまり見られない。なにしろ走行距離がながい。昨年生まれたばかりの二歳馬のレースが一五キロメートルで、六歳馬以上なら三〇キロメートルである。地方にゆ



スタート直後

が情報ツールであった伝統を継承しているといえるだろう。

## ウマの気合いが満ちたとき

それにしても、数百頭ものウマが同時にどうやってスタートするのか。ゲートもなければ、綱も張られないのだから。

一九九七年七月、ウランバートルの南ゾーンモドで開催された地方競馬において、そのスタート風景を見ることができた。子どもたちがウマにうたいかけるように「ギンゴーギンゴー」と口ずさみながら、ゴール地点からはなれて、スタート地点へむかう。少しする賢い子どもたちはなるべく遅れてゆこうとするので、後ろから大人が追うのだ、という。そうこうするうちに、またたくまにウマたちがいつせいに反転し、それがスタートとなった。おおよそのスタート時刻とスタート場所は決まっているけれども、ウマの気合いが満ちたとき、それがスタートなのだ。だから、一瞬たりとも目がはなせない。

一九八八年七月、中国内モンゴルで見学したときは、子どもたちが「ギンゴーギンゴー」と口ずさみながら、オボー（土地神さま）のまわりを三回まわっているうちにスタートとなった。ウマとともに人が育つ

一九九七年の夏はひどい干ばつで、レースはきわめて過酷だった。何しろ救急車が出動し、倒れたウマに点滴をしてまわるほどだった。わたしがホームステイをしていた家の男の子は、二歳馬に乗って初競馬に挑戦していた。入賞は



布を着せて走らせる減量トレーニング

けばもつとながいがコースもある。まさしく耐久レースであり、いわば「人馬一体のマラソン」なのである。

モンゴル帝国時代にユーラシア一帯にジャムチとよばれる駅伝制度が整備された。駅が決められ、その駅の周辺で遊牧をする站戸は公務出張者にウマや食事を提供する義務をうけおった。はやがけの乗り継ぎシステムによる通信網である。モンゴル競馬の距離は、そうした、はやがけウマの交代距離に匹敵する。ウマ

のがしたけれども完走した彼は一段と大人びて見えたものだった。

現在では、ビジネスで成功した富裕層の人たちが駿馬を競って購入し、あたかもその財力を競うかのような競馬がおこなわれるようになっていく。将来は、周回コースの競馬や、賭けもはじまるかもしれない。それでも、乗り手が子どもであるかぎり、競馬によって、ウマとともに人が育つという教育方法は継承されていくだろう。



オボーとよばれる土地神さまのよりしろをまわって必勝祈願する子どもたち



# 天馬空を行く

## 馬のファンタジー

山中 由里子 民博 民族文化研究部

### 天かける馬

馬という動物は人間の空想を自由奔放にかけめぐってきた動物である。試しにウイキペディアで「神話・伝説の馬」を検索すると、他の神話上のほ乳類動物より断然と関連ページが多い。人間と親密な関係を保ってきた、頼りになる、草食動物であるからか、爬虫類や猛獣・猛禽ほどモンスタライズはされていないようで、神の乗り物を引いたり、英雄と運命をともにする名馬であつたりする。なかでも、山川万里をひと飛びにし、天界と地上を行き来することができる「天かける馬」は、世界各地の神話や宗教説話で重要な位置を占めており、翼が生えた馬という優美な姿で視覚的に表象されることが多い。

### 科学的仮想の空へ

大空にはばたく馬の絵姿が、実写の映像として初めて立ち現れたのは、おそらく一九二四年公開の映画『バグダッドの盗賊』のなかであつた。『一夜一夜物語』をベースとしたこの娯楽映画には当時の最先端の特殊撮影技術が使われていた。雲間を走る白馬が銀幕にあらわれたとき、聴衆は度胆を抜かれたことであろう。

このシーンの元になった一夜の「黒檀の馬」の

物語（三五七―三七二夜）では、空飛ぶ馬は、超自然的な合成獣ではなく、また魔力によって浮遊するのではなく、じつはあくまでも人間の英知が作り出した機械仕掛けの乗り物ということになっている。この物語では、三人の賢者が、ペルシアの王様のご愛顧をえるために、それぞれが発明した珍妙な装置を持つて宮廷に参上する。まず高覧に供されるのは、「双の翼をもつてはばたき、啼き声をたてる」黄金の孔雀の機械時計。二人目の賢者が取り出したのは、敵が都城に侵入すると、たちまち勝手に鳴り響くという真鍮のラッパ。三人目の賢者が開発した黒檀の馬は、黒檀と象牙でつくられた秀麗な肢体に、見事な細工の鞍や手綱が装着されている。しかも、「ひとたび人間がこれにうち跨りますれば、いずれの国にてあれ、望みのままのところに至る」という。

その場にいた王子は、試乗は是非ともこのわたしにと、操縦方法の説明を聞きませずにいきなり跨り、上昇レバーをひねる。やいなや、この軽率な王子を乗せたまま、馬はあつというまに雲の彼



映画「バグダッドの盗賊」(1924年)のポスター。映画に登場した空飛ぶ馬はペガサスのように翼がはえていた。標本番号 H0253663

方に消えてしまふ。離陸の描写の一節を読むと、噴射推進の原理に基づいて飛ぶ「ジェット機」であることがわかる。

馬はさつと緊張すると、やがてはげしくふるいし、ついに、どの馬もよくするような独特の動き方をしはじめました。そうして空気を腹いっぱい吸いこんだかと思うと、さつと身をもたげ、大空へと飛昇して行きました。（前嶋信次訳『アラビアンナイト』平凡社、一三〇頁）

その後王子は、操縦法を会得し、知恵も使つてイエメンの美しい姫と結ばれ、めでたし、めでたしなのであるが、黒檀の馬は最後に王子の父によつて解体されてしまふ。機械をめぐる冒険を経て王子がえた心の成熟のほうだが、巧妙な機械よりもはるかに価値がある、という教訓のこの物語は、ファンタジーというよりサイエンス・フィクションのしりであるといえるかもしれない。



セネガルのガラス絵に描かれたブラク。聖典クルアーンの「夜の旅」の章では、預言者ムハンマドは天馬ブラクに乗り、メッカからエルサレムに飛び、そこから昇天し、天使ジブリール（ガブリエル）に会う。人の顔をした馬として描かれるが、クルアーンには頭が人間であるとは書かれていない。標本番号 H0222896

# 午年には、やる気に拍車をかけて

## 乗馬のススメ

平石 典子 筑波大学准教授

### 拍車をかける？

「アラブの春」の先駆けとなったチュニジアで、政治の混乱が続く。「中略」野党党首の暗殺事件も混乱に拍車をかけ、新しい国の基盤となる憲法制定が進んでいない。

（『朝日新聞』二〇一三年一〇月一七日朝刊）

このチュニジアの政治状況を伝えた新聞記事に登場する「拍車をかける」という表現に、違和感を覚える人は殆どいないだろう。しかしながら、「拍車」とはどんなものなのか、ということになると、話は違ってくる。果たして、「拍車」を実際に見たことのある人はどれくらいいるだろうか？

「馬の耳に念仏」や「馬子にも衣装」など、馬に

まつわることわざは多いが、「拍車をかける」というのは、馬への働きかけの表現である。じつは、馬術の世界では、「拍車をかける」ではなく、「拍車を入れる」という言い方をするのが、拍車は、馬の注意を乗り手に向けるためのもので、馬とのコミュニケーション手段として使われるのだ。そうした言い回しが日常表現になるのは興味深い

が、一方で、「拍車」がぴんとこない、という事実からは、「乗馬」という営みが、現代の我々にとってはあまり身近なものでないこともわかる。

### 近代馬術と軍隊

「拍車をかける」という表現は、近代日本における乗馬・馬術の歴史も説明してくれる。馬にまつわる言い回しには、「人間万事 塞翁が馬」のような、中国の故事に由来するものも多いが、「拍車」ということばは、英語ejectの翻訳語として近代になつてから定着したものなのだ。近代日本は、それまでの騎馬方法を捨て、ヨーロッパ式の馬術を取り入れたが、その実践の場は、おもに陸軍であつた。一九三二年のロサンゼルス五輪では、西竹一中尉とウラヌス号が障碍飛越で金メダルを獲得しているが、当時の五輪代表選手は、全員が軍人であり、一般人が乗馬を楽しむ環境が整っていたとは言い難い。「拍車」も、軍人を中心とする一部の人びとだけが知るものだったのだろう。



1932年ロサンゼルス五輪の西竹一中尉とウラヌス号（馬の博物館所蔵）

### 乗馬のススメ

翻つてみると、現在、馬術の盛んな欧州・豪州・米国などでは、乗馬は特に女の子に人気のスポーツであり、習い事である。日本にも乗馬クラブが増え、ホースセラピーなどもおこなわれている。五輪種目で唯一、男女の別なく競技がおこなわれる馬術は、人間の体格や筋力の差があまり結果に反映しないので、子どもからお年寄りまで、皆がそれぞれの体力にあわせて楽しめるスポーツだといえるだろう。また、馬はとても賢く、かわいい動物なので、乗馬の後の手入れなどの触れ合いも楽しい（くれぐれも賢い馬にナメられないように）。「拍車」は馬の腹を刺激するものなので、鞭とともに、「動物虐待」ととらえられることもあるが、馬術の世界では、拍車をつけた姿が正装とされ、拍車がきちんと使えるようになれば、ある程度乗馬の技術が取得できている、ということになる。二〇一四年の午年、実際に馬上で、自分が「拍車をかける」べきことについて考えてみるのはいかがだろうか。

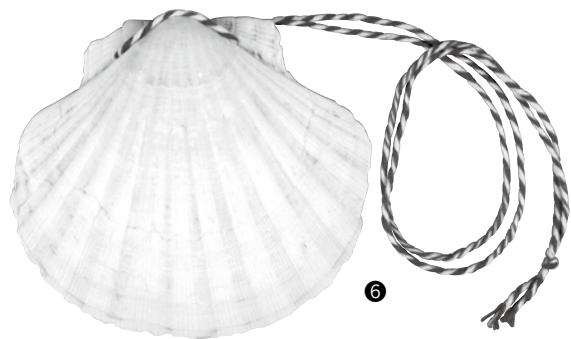


現在オリンピック競技でもある「フリティッシュ馬術」では、「襷拍」が一般的である



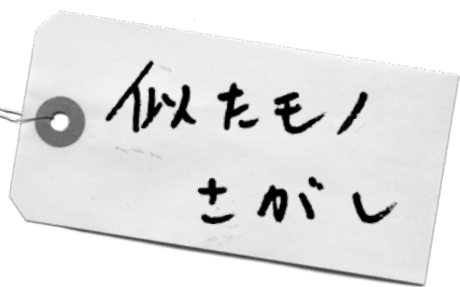
ウエスタン馬術で用いられる「輪拍」。地域：チリ、標本番号 H0196639





- ①馬蹄、フランス、  
幅 15 × 奥行 15 × 高さ 3.1cm、H0158233
- ②銀製のスプーン、デンマーク、  
幅 4.7 × 奥行 22 cm、H0118095  
出産や誕生日、結婚式などの祝い事  
のときに贈られる
- ③魔除け用頭蓋骨、インド、  
幅 12 × 奥行 20 × 高さ 12cm、H0167976  
魔除けのために家屋に吊るす動物の頭  
蓋骨。ネコ科のウンピョウのものとも  
みられる
- ④鍵型のお守り、エジプト、  
縦 12 × 横 5.1 × 高さ 0.6cm、H0109604
- ⑤魔除け用 牛の角、ブラジル、  
幅 15 × 長さ 22 × 高さ 7.2cm、H0224645
- ⑥巡礼用 装身具、スペイン、  
幅 12 × 高さ 2.9 × 全長 48cm、H0231175  
聖ヤコブを象徴するホタテ貝が、サン  
チャゴ・デ・コンポステーラ巡礼者のお  
守りとなっている
- ⑦縁起物（熊手）、日本、  
縦 103 × 横 73 cm、H0026877  
運や財をかき集める願いが込められて  
いる
- ⑧トカゲを模した護符、アメリカ、  
幅 16 × 奥行 31 × 高さ 3.2cm、H0075155
- ⑨張子人形（ピンピン鯛）、日本、  
幅 14 × 奥行 14 × 高さ 15cm、H0012073

※寸法は計測時の最大値を示す。



似てるけどどこか違う  
似てないようでどこか似てる  
いろんな工夫や思いを映す  
みんなの所蔵資料

## 信じてはいないけど…… ——身近なお守りたち

宇田川 妙子 民博 民族社会研究部

今年ローマの知り合いの家を訪れたとき、軒先に馬蹄が飾られていることに気づいた。馬蹄はヨーロッパでは幸運をもたらすといわれ、イタリアでも普及しているお守りのひとつだ。

イタリアというとローマ法王のお膝元のカトリックの国だが、じつはみなかなり迷信深い。昨年末、サッカー選手四〇〇〇人を対象におこなわれた調査では、ラッキーマイテムや魔除けを身につけたり、迷信にちなむしぐさをする者は、八六パーセントにのぼるという結果が出た。もっとも人気のあるお守りは、牛の角の形をしたコルノ（コルネットともよぶ）、馬蹄、テントウムシ、



四つ葉のクローバーで、しぐさとしては鉄に触れる、赤いものを身につけるなどであったという。

わたしの知り合いのイタリア人たちも、最低ひとつやふたつのお守りをもっている。なかでも多いのがやはりコルノであり、ネックレス、キーホルダーなどに付けている。これはイタリア独特のものといわれ、たいていは赤で、サンゴ製がよいのだが、銀製のものもある。ほかに、錠や鍵のアクセサリも幸運をもたらすとされ、約束の成就や運命の扉を開くという意味だと語る者もいる。

そして家のなかにも、さりげなく蜘蛛

（富をもたらすといふ）の置物が置かれていたり、麦の穂（かならず三本。三位一体の意味とか）が飾られていたりする。古い木製の車輪を壁にかけている家もあり、単なるオブジェと思いきや、これまた幸運をもたらすもので、ちょっと運氣が下がったら回すのだそう。

こうしたお守りの類は、地域や世代によっても違うし、伝統的なものから最近広まったものまでさまざまである。とはいえ共通しているのは、けっして自分でお守りを買ってはならないということだ。お守りとは、ほかの誰かからもらうものであり、また、偶然に拾ったものなら、運を拾うという意味で、なお良いそうだ。馬蹄を飾っていた知り合いも、道端に落ちていたとニマリしながら話してくれた。

イタリアでは現在でも、人びとは「信じてはいないけど、何があるかわからないから」とつぶやきつつ、日々あちこちでお守りを見つけては身につけ、身近に飾り、人にあげたりもったりしている。そんな彼らの様子からは、迷信深いというよりも、ある種の豊かさを感じることができるのではないだろうか。



年末年始展示イベント「うま」

2014年の干支である「うま」をテーマに、みんなく所蔵の資料や写真を展示し、世界各地の「うま」にかかわる興味深い情報をご紹介します。

会期 1月28日(火)まで  
会場 本館 探究ひろば横休憩所

■関連イベント

◆キャラリトーク  
日時 1月13日(月・祝)

11時～11時20分/14時30分～14時50分  
解説 小林繁樹(本館教授)

会場 本館 探究ひろば横休憩所  
※申込不要、参加無料

◆ワークショップ

「大きな『うま』ジグソーパズルに挑戦!」  
日時 1月13日(月・祝)、1月19日(日)

10時30分～16時30分(受付16時終了)  
会場 エントランスホール

※当日受付、先着順、参加無料  
※6歳未満の方は保護者同伴でご参加ください。

「おりがみで遊ぼう!」  
— 干支シリーズ「干」 —

日時 1月13日(月・祝)  
10時/10時45分/11時30分/  
13時/13時45分/14時30分(各回40分)  
会場 エントランスホール(定員各回10名)  
※当日受付、先着順、13時以降参加費50円

「干支の『干』で絵馬をつくらう」  
日時 1月26日(日) 10時30分～16時

会場 エントランスホール(定員100名)  
※当日受付、先着順、参加無料

国際研究フォーラム

「ロシアと中国の国境——諸民族の混住する社会における『戦略的バートナーシップ』とは何か?」

中国東北部を対象に、諸民族関係を考察する鍵概念として、「戦略的バートナーシップ」をとりあげて、議論します。

日程 1月8日(水)、1月9日(木)  
会場 本館 第4セミナー室

※要事前申込、研究者対象  
申込、お問い合わせ先  
小長谷研究室  
電話 06・6878・8274(直通)

国際シンポジウム

「北太平洋沿岸諸文化の比較研究——先住権と海洋資源の利用を中心に」

本シンポジウムでは、北太平洋沿岸諸文化に関する研究のこれまでの成果と調査の現状を比較検討します。

日程 1月11日(土)～1月13日(月・祝)  
会場 本館 第4セミナー室(各回定員80名)

※申込不要、先着順、参加無料、11日のみ同時通訳あり

公開フォーラム

「古代文明の生成——西アジアとアンデス」

西アジアとアンデスの最新の調査成果から、両古代文明の特性について討論していきます。

日程 1月26日(日)  
会場 JPTタワーホール&カンファレンス(東京)(定員170名)

※申込不要、先着順、参加無料

みんなく映画会/みんなくワールドシネマ「ラビット・ホール」

交通事故で息子をなくした家族の和解と再生を描いた映画を通して、家族のあり方をあらためて考えるきっかけにしてください。

日時 1月25日(土) 13時30分～16時  
会場 講堂(定員450名)

※申込不要、先着順、参加無料  
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

●展示場リニューアル工事のお知らせ

展示場リニューアル工事のため、朝鮮半島の文化・中国地域の文化・日本の文化(沖縄のくらし)が閉鎖されます。

期間 3月19日(水)まで

●展示場一部閉鎖のお知らせ

本館2階展示場の空調設備更新のため、左記の期間、展示場の一部閉鎖をいたします。

その間は観覧無料となります(ただし自然文化園(有料区域)を通行される場合は、入園料が必要です)。ご理解とご協力をお願いします。

1. 1月22日(水)まで

音楽の一部(言語、南アジア、東南アジア、中央・北アジア、アイヌの文化、日本の文化、ナビひろば、休憩所が閉鎖されます。

2. 1月23日(木)～2月19日(水)  
オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、音楽の一部が閉鎖されます。

●休館日のお知らせ

年始は1月4日(土)まで休館します。

※各イベントについてくわしくはホームページをご覧ください。

※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時から17時(土日祝を除く)です。

国立民族学博物館創設40周年記念  
日本文化人類学会50周年記念  
「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

会期 2月19日(水)～6月9日(月)  
会場 国立新美術館 企画展示室2E(東京)

国立民族学博物館創設40周年記念  
日本文化人類学会50周年記念

みんなくミニナール

会場 国立民族学博物館 講堂  
時間 13時30分～15時(13時開場)

定員 450名(当日先着順)  
参加費 無料

第428回 1月18日(土)  
熱狂エチオジャズ・イン・

講師 川瀬慈(国立民族学博物館助教)



アジスアベバのジャズ・ファンクバンド

エチオピアでは、50年代から70年代にかけて、皇帝ハイレセラシエの護衛楽団がエチオピア特有のメロディと西洋のポピュラー音楽を絶妙にブレンドさせながら独自の音楽世界を発展させました。本ゼミナールでは、現在各国の音楽シーンで話題沸騰の「エチオジャズ」の歴史とその世界的な広がり、音楽家たちの素顔を紹介します。

第429回 2月15日(土)  
ベトナムの黒タイのうた、おはなし

講師 櫻永真佐夫(国立民族学博物館准教授)



山がちなベトナム西北地方には、たくさんの民族が高度に応じてすみわけています。そのうち黒タイという人びとは、盆地に水田をひらいてくらししています。かれらが村で伝えてきた歌やお話を紹介し、かれらが自分たちのくらしをどのようにイメージしているのか、村のくらしの現状にふれながらお話しします。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室  
定員 96名(当日先着順、会員登録必須)

第427回 1月11日(土) 14時～15時  
「みんなくコレクションを語る」

中央アジアの民家の現在  
講師 藤本透子(国立民族学博物館助教)

※収集されたばかりのゆりかごやフェルトの敷物、弦楽器などをご覧いただきます。

第428回 2月1日(土) 14時～15時  
神殿更新で社会が変わる——南米アンデス文明の誕生

講師 関雄二(国立民族学博物館教授)

2013年夏に「ジャガー人間」の石像が発掘されたことはみなさんの記憶にも新しいことと思います。この発見は紀元前8000～5000年代がアンデス社会の大きな転換点であったことを示す重要な意味をもっています。

従来、食料生産の向上が文明の推進力と考えられてきましたが、そうではない可能性を示す「神殿更新」説も紹介しながら、今回の発見の意義についてお話しします。

第429回 3月1日(土) 14時～15時  
梅棹忠夫のモンゴル調査をたぐる

講師 小長谷有紀(国立民族学博物館教授)

東京講演会  
会場 国立新美術館研修室A・B  
定員 60名(要事前申込)

第108回 3月9日(日) 13時半～14時15分  
国立新美術館での「イメージの力」展開催にあたって

講師 須藤健一(国立民族学博物館館長)

※須藤館長の講演会に続いて、国立新美術館研究員による展示概要の解説(30分)もおこないます。

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112  
FAX 06-6876-0875  
e-mail shop@senri-f.or.jp  
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。  
オンラインショップ  
「World Wide Bazaar」  
http://www.senri-f.or.jp/shop/

「世界のごちそう」レトルト食品登場。難民自立の支援にも。

神戸の多国籍料理店「世界のごちそうパレルモ」さんの料理がレトルトパックになりました。

食を通して、差別や貧困など世界のさまざまな問題を多くの人に知ってほしいという願いがこめられた四種類の料理です。なかでもミャンマーの「チエッタールヒン(鶏肉とジャガイモのスライス煮込み)」は、難民支援協会発行の「海を渡った故郷の味——Flavours Without Borders」のレシピをもとにした「ラボメニュー」売り上げの一部がこの協会に寄付されます(協会については本誌2013年8月号「多文化をあきなう」を参照)。世界の料理を味わいながら、その地に暮らす人ひとの生活や文化に目を向けてみませんか。



世界のごちそうシリーズ レトルト4種 (一人前、200g)  
ミャンマーの家庭の味「チエッタールヒン」(写真右上)  
世界のごちそう パレルモの名物料理「アラビアンライス」  
ブラジルの国民食「フェイジョアータ」 各 630円  
アメリカ南部の料理「ガンボ」  
書籍「海を渡った故郷の味——Flavours Without Borders」 1,575円

価格はすべて税込

●人間文化研究機構 監修

「HUMAN——知の森へのいざない」vol.05  
平凡社 定価1,575円



特集「酒と日本文化」  
石毛直道・民博名誉教授と民俗学者・神崎宣武・旅の文化研究所長が酒について縦横に語り、多分野の研究者と酵母開発者、きき酒師等が、太古から現代までの醸造と飲酒の様相について記述します。

●西尾哲夫 著  
『ヴェニスの商人の異人論——人肉・ポンドと他者認識の民族学』



みずす書房 定価4,410円  
借金の形に約束した人肉1ポンドの意味は? シェイクスピアの源流をたどり世界に類話を渉猟して社会構造を明かす刺激的な文化論です。

刊行物紹介

●平井京之介 著  
『微笑みの国の工場——タイで働くということ(フィールドワーク選書)』



臨川書店 定価2,100円  
日系工場のタイ人労働者と日本人駐在員とのあいだで、通訳兼マネージャーとして働きながら、企業の実態や労働者の本音・価値観に迫ります。



## 仮面と人形の待つ家 —インドネシア・バリ島

インドネシア・バリ島。熱帯雨林に抱かれた村マスには、数千もの仮面や人形が展示・收藏されている館がある。そこで待ち受けるのは、仮面と人形に宿る魂か、それとも人間のもつイメージの力か。



### 仮面と人形の家を訪れる

インドネシアには、豊かな仮面・人形文化が存在する。仮面舞踊や劇、人形劇や影絵などの芸能が人びとの娯楽として親しまれていることに加え、それらが儀礼の一部として上演されたり、また仮面や人形自体が神格や霊力を宿す御神体のような役割を担っていたりする地域もある。

バリ島とジャワ島を初めとするインドネシア各地の人形や仮面を一度に見ることができるところがある。これが、今回紹介するステシア・ダルマ 仮面と操り人形の家 (Setia Darma House of Masks and Puppets)だ。中部バリの代表的な観光地ウブド (Ubud) から南に下ったマス村にあるこの「家」は、その豊富なコレクションや、手入れされた心地よい庭、そして各地の伝統建築を取り入れた建物によって、バリのなかでもユニークな魅力をはなっている。

### 手ごわい博物館

展示のほとんどがガラスケースのなかに入っていない点は、民博と共通である。また使用跡の少ない(あるいはまったく使用されなかったことのない)比較的状态の良いものが揃っている点も特徴である。実際の芸能上演では、演者の家系で受け継がれ、時間とともに変色して小さな傷の沢山ついた歴史ある仮面や人形に出会うことがある。こういった古びた表情には特別な味わいがある。他方この展示では、職人が技術をつぎ込んで作った仮面や人形の多くがきれいに保存されており、鮮やかな着色の細部までを楽しむことができる。

展示品はとにかく豊富である。影絵芝居や人形劇では、ひとつの演目を演じるために、数十体の人形が使われる。これらの人形がずらりと並び光景には圧倒される。ひとつひとつと目を合わせたくなるからだろうか、一回の訪問で全部を観てまわろうとすると、へとへとになってしまう手ごわい博物館でもある。八〇〇点前後にのぼる人・神々・動物たちをモチーフにした作品の数々を見ると、我々人間はかくも豊かに顔を表現してきたのだということを実感する。

### 資料? 作品?

展示物に関しての文字による説明はほとんど無いが、仮面や人形の名前、演目名、作られた地方名が記され、また多くのものについて、作者の名前も表示されている。これが、民族学の一般的な博物館展示と大きく異なる点である。それぞれの展示物は、演目や地域を代表する資料であると同時に、作り手の作品でもある。筆者は、バリの仮面舞踊劇を専門に研究していることもあり、仮面には特に目がゆくのだが、バリのシンガパドゥウ村の仮面作りの名人イ・ワン・タングー氏の作品は、数も多く、存在感を放っている。インドネシアの各地域のなかでも、加工が細かく洗練された印象をうけるバリの仮面。そのなかにあっても、タングーさんの作品は繊細なつくりで生き生きとした表情を見せている。ちなみに民博では、現在タングーさんの仮面を購入し展示する計画が持ち上がっている。これももし実現すれば、数年後タングーさんと息子さんたちによる仮面が、リニューアルされた東南アジア展示場で皆さんを迎えることになる。

### 世相を映す仮面と人形作り

この博物館が収集しているのは基本的に「伝統芸能」とよばれるジャンルの仮面や人形である。コレクションの重要な部分のひとつであるワン・クリット (Wayang Kulit 影絵劇) は、世界文化遺産にも登録されている。しかし、この博物館では「遺産」や「伝統」という言葉が想起する歴史的で重々しいイメージを軽やかにすり抜ける、ユーモアや、現代性や、大衆性を帯びた仮面や人形も数多く収集されている。例えばオバマ大統領の姿の操り人形、アニメを題材とした影絵人形なども展示されている。なかには博物館の展示のために特注されたものもあるようで(例えばこの博物館のオーナーをモデルにした人形もある)、すべての仮面や人形が実際の上演に使われ得るものなのかは不明であるが、少なくともインドネシアの仮面作りや人形作りが、世相を反映しながら、現在も生き生きと息づいていることを理解できる。

吉田 ゆか子  
民博 機関研究員



オバマ大統領の人形



アニメを題材とした影絵人形



タングー氏の工房で作られた仮面



地方色豊かな建築を用いた展示場の内部



緑豊かな村の一面にある



フェアトレードタウンは、フェアトレードの普及にくわえて、地域の活性化、貢献も目的としている。札幌では、フェアトレードタウンをめざして、食料自給率の高い北海道ならではの活動がおこなわれている。

## フェアトレードフェスタ in さっぽろの開催

フェアトレード北海道は、札幌・北海道でフェアトレードの普及を通じて、持続可能で公正・平和な地球社会の実現を目指す市民の団体である。名前をフェアトレード北海道と決めたのが二〇〇九年一〇月。ヴィジョンとミッションを定めて、まだ組織的な活動を始めて間もない団体である。

フェアトレード北海道の誕生に先立ち、札幌では二〇〇三年からフェアトレードの普及を願う市民によって、「フェアトレードフェスタ in さっぽろ」が開催されて来た。札幌・北海道の市民がフェアトレードに楽しみながら親しむ、年に一度のお祭りである。二〇〇三年から二〇〇六年までは廃校となった小学校や、屋内のイベントスペースを借りての開催だったが、二〇〇七年からは札幌の中心街で多くの市民が集う大通公園での野外開催となり、毎年六月中旬から下旬の週末、土日の二日間おこなわれている。

この運営にかかわった人たちが、年に一回の単発のイベントだけでなく、北海道の特色を生かした数多くある。これらの活動を広く紹介し、さらに育てること。第二には、北海道だけでなく、全国各地の草の根レベルでフェアトレードに取り組んでいるフェアトレード団体の活動を紹介し、そのネットワークを作ること。こうした趣旨に共鳴して、フェアトレードフェスタ in さっぽろには、全国から出展、商品紹介をおこなう団体が集う。

また、3・11をきっかけにして二〇一一年から新しいブースが生まれた。復興支援ブースである。以来、被災地のまちづくりを応援するグッズがフェアトレードフェスタに仲間入りした。さらに、就労応援ブース、北海道の材料にこだわる北海道ブースも設けられた。再生可能・自然エネルギーの発展もおこなわれている。

## 北海道がリードする取り組み

北海道は、日本の食糧基地ともいわれる。全国の食料自給率はカロリーベースで四〇パーセントを割っているのに対し、北海道では二〇〇パーセントを超えている。フェアトレードの核心が生産者との関係性にあるとすれば、北海道自身がその生産者を農畜産業関連分野に多く抱えている。フェアトレードの原則を、これらの生産者に適用して、生産者と消費者がより顔の見える関係で結びあうことができるか？ また、海外の生産者が生んだフェアトレード材料と北海道の原料を使って、新しいフェアトレードが展開できないか？ 夢は広がり、その一部は実現しつつある。例えば、フェアトレードのカカオ豆と、北海道産の乳製品と合わせたミルクチョコレート。当初は、技術的な問題から不可能と

フェアトレードの普及を毎年おこなってゆくためにフェアトレード北海道を設立した。フェアトレードフェスタの開催は、フェアトレード北海道がかかわる重要な事業のひとつである。

## ふたつのポリシー

国内最大規模のフェアトレードの野外イベントといわれるフェアトレードフェスタ in さっぽろには、開始当初から大切にしているポリシーがある。第一に、途上国の厳しい条件におかれた生産者と結びついて、コツコツと地道にフェアトレードを進めている活動を大切にすること。東チモールマウベシ郡のコーヒー生産者と提携しているほっかいどうピーストレード、グアテマラの先住民族のコーヒー生産者と提携しているマヤコーヒー、そして、インドのビーズ生産者から仕入れた材料を使って、福祉作業所の人びとと提携して独自のフェアトレード・アクセサリーを製作している SOLOS など、札幌・北海道には、地元で拠点を置いて、草の根フェアトレードを展開している団体が

も思われたこの夢のチョコレートは、現在カカオラボ・ホッカイドウで製造・販売している。また、北星フェアトレードでは、カフェで提供するクッキー等を道産材料とフェアトレード材料で手作りして提供し、好評をえている。

## 未来に向かって

フェアトレードというモノを介した取引によって、わたしたちはそのモノの向こうにいるヒトとの関係を問い直し、それをより公正なものに変えようとする。公正という価値の実現が求められるのは、地域においても、海外の生産者との関係においても同様である。安価な商品を生産するために、あるいは快適・安全な生活を実現するために誰かが犠牲を強いられている関係は決して公正な、フェアな関係とはいえない。

エネルギー、食料、衣料品、といったわたしたちの日々の暮らしを支えるモノを作り出す過程でそこにかかわるヒトが犠牲にされることをわたしたちは望まない。暮らしのあらゆる側面を注意深く見直し、そこに人間らしい暮らしのわかち合いが実現されるような、暮らしのあり方、作り方、買物の仕方を考えて、実現させてゆきたいと思う。

心のなかの国境線を引き直し、ローカルな場においても、グローバルな関係においても、人間らしい暮らしがわかち合える関係を作り出すこと、それがわたしたちの活動の目標である。そして、地域と地球を結んで公正な関係を作り出す活動の一環として、フェアトレードタウンを北海道に実現させたいと思う。



アフリカドラムで会場がひとつになる。フェアトレードフェスタ in さっぽろ2013



道産カボチャとフェアトレード材料を使ったタルト



北星フェアトレードの学生と地元の生産者さん



フェアトレードフェスタ。草の根フェアトレードブース

さをり織りワークショップ



フェアトレードフェスタ in さっぽろ2008会場





# フィールド で考える

退官寄稿

## 手仕事によるモノづくりの 現場にて

吉本 忍よしもとしのぶ  
民博民族文化研究部

### 輪状の織物との出会い

わたしがはじめてフィールドワークをおこなったのは、四四年前の一九七〇年。その現場はインドネシア東部のティモール島である。当時、京都市立芸大の工芸科染織専攻の四回生であったわたしが、ティモール島に行くことになったのは、探検部に所属していたことに起因しており、今日、「イカット」の名で世界的に知られているインドネシアの絣織物の製作現場での調査がおもな目的であった。とはいうものの、当時の日本ではインドネシアのイカットについての情報は無きに等しく、オランダの文献によって、ティモール島をはじめとする島々で二〇世紀前半にイカットが織られていたことを把握していたにすぎない。そうしたことから一九七〇年の時点で、ティモール島でイカットが織られているか否かということについては、現地入りするまで不明であった。しかし、さいわいにも飛行機が到着したティモール島クパンの空港で

目にした人たちの多くは、イカットを身にまとい、それらのイカットが島のいたるところで織られていることがあきらかになった。

このはじめてのフィールドワークでわたしは、さまざまな未知の体験をしたが、最大の驚きは、イカットをはじめとするすべての織物が輪状に織りあげられていることであった。このことは、織物を織ったことがないと理解しにくいだが、わたしが大学の製作実習で織りを習ったときの織物の織り上がりのかたちは四角形であり、日本の伝統的な織物の織りあがりのかたちも、すべて四角形である。したがって、輪状の織物との出会いは、当時のわたしの常識的な理解をはるかに超越したことであり、この驚天動地ともいえる体験によって、「常識を疑ってみる」ということが、その後のフィールドワークでのキーワードとなっていった。

そして、今に至るまで世界各地でおこなってきたフィールドワークでのたび重なる発見が、つづ

なかで、「織物とは何か」「織るということとは何か」ということについて、試行錯誤を繰り返しながらたどりついたのが、一昨年（二〇一二年）の秋の民博の特別展「世界の織機と織物」織って！みて！織りのカラクリ大発見」であり、この展覧会では、「織物」とは「張力をかけたタテ糸にヨコ糸を組み合わせたモノ」というあらたな定義を提起した。

### 人類は進歩したのか？

さて、わたしがはじめてフィールドワークをおこなった一九七〇年には、民博がある万博公園を会場として、日本万国博覧会が開催された。このときのテーマは「人類の進歩と調和」であったが、世界各地で織るということをはじめとする手仕事によるモノづくりを基軸としたフィールドワークをつづけていくなかで、わたしは「人類の進歩」について次第に懐疑的な思いを抱くようになっていった。

たとえば、織物を織るという技術は人類史の中枢技術であり、産業革命のみならずIT革命も織りの技術の延長線上に出現し、織りの技術は、新石器時代から現代まで、人類の社会や文化の進歩と発展に深く関わってきた。しかし、今日に至るまでの機械化や大量生産をはじめとした、織りの技術に起因するさまざまな事象のうちには、あきらかに退化や衰退と考えざるをえない状況も出現している。

### 手仕事への回帰

織りの技術は、人類が先祖から受け継いできた手仕事のひとつであるが、皮肉にも手仕事の集積

から誕生した動力織機の出現以降、従来の手仕事によるモノづくりという古くからの生産システムは、次第に動力で稼働する機械にとって代わられて、機械化による大量生産システムが全世界的に普及することとなった。そして、今やわれわれは、人類がこれまでに経験したことのなきわめて便利な時代のなかで生きている。しかし、その一方でわれわれは、いたるところで環境破壊を引き起こし、人類の文化遺産ともいえる手仕事によるモノづくりの多くも放棄しつづけている。たしかに現代社会は、便利このうえない時代ではあるが、自然災害は今なお世界中のいたるところで頻発している。自らがモノづくりをすることなしに、機械

化によって大量生産されたモノが容易に手に入るという生活があたりまえになってしまったわれわれが、手仕事によるモノづくりを放棄しつづけているということは、自然災害でライフラインが途絶したさいの生き延びる術をも放棄しつづけているということにほかならない。

そうしたことから先の特別展では、われわれは今まさに「手仕事への回帰」を真摯に実行に移すべきであるというメッセージを発信した。これは、半世紀近いフィールドワークの末にたどりついた答えである。



イカットを織るアトニの女性（インドネシア、ティモール島。1970年）



イカットの衣装をまとったアトニの父と娘（インドネシア、ティモール島。1970年）



輪状に織りあがったバリ島トゥンガナン村（インドネシア）のイカット



特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」の展示風景。会場には、織物のタテ糸をイメージした展示デザインがほどこされた



「物質性」という語の射程は、モノ (object) の製作技法や社会的役割や文化的意味にとどまらない。世界と人間が物質 (matter, material) からできているという事実の全体である。

人が生まれ落ち、生き、死んでいく、この世界はどのような世界なのか——などとぼんやり考えながら歩いていて、石に躓いて怪我をして血が出る。痛い。石がもつと軟らかく、皮膚がもつと硬かったら、違っただろう。こうしてわたしは、この世界が、さまざまな性質をもつさまざまなモノから成り立っていることを痛感する。しかもモノの性質は不変ではなく、萎びたり、摩耗したり、錆びたり、腐ったりする。それは必ずしも劣化ではない。たとえば、仏像が古色を帯びたり、道具が手になじんだりもする。モノとしての同一性も永久ではなく、分解したり変質したりして別のモノへと変じていく。石は岩から砂への変容の途上にある。わたしの身体も、単細胞から発して多様な物質を摂取・排出した末、死んで土に還るか、焼かれて「お骨」になる。つまり、ある物質にとって、あるモノとして存在するのは一時にすぎない。物質は、生々流転・輪廻転生の流れのなかにある。

人間は、物質世界に外から関与するのではなく、そのなかで生きている。人類学者のインゴルドは、それを「住み込んでいる」 (inhabit, dwell in) と表現する。この世界は住人に対して条件として働く。つまり物質は、人間の行動を制約すると同時にさまざまなことを可能にする。海は行く手を遮り、粘土は器の素材となる。しかし船を操れる者には海は障害ではなく、土器の作り方を知らなければ粘土は器にならない。要するに、物質の

## 物質性 Materiality

ふるか よしあき 九州大学教授  
古谷 嘉章

### 人間学の キーワード

果てしない……

性質は、それを体験する人間との関係のなかで意味を獲得する。わたしたちは身体に具わる感覚を介して世界を体験する。そのとき、視覚に勝るとも劣らない重要性をもつのが、物質との「触れる・触る」というかかわりである。わたしたちは、物質世界に直に働きかけ、物質を材料として自然界には存在しなかったモノを作り出す。そのなかで、文化という営みが姿を現す。

二十一世紀の今日、身体を介した直のかかわりではなく、インターネットや仮想現実が重要性を増して、世界の物質性が希薄になりつつあるかのようだ。しかし、人間はまだ、物質たる身体を脱ぎ捨てて純粋な意識へと進化してはいない。仮想現実も、装置なしでは存在できないのだから、物質世界の外側にあるわけではない。

わたしたちが生きる物質世界は、自然科学の守備範囲とされている。それに対して、民族誌が報告してきたさまざまな文化の世界観は、神話や物語としては興味深くても、客観的物質世界についての正しい科学的記述とは違う「誤った解釈」にすぎないと考えられている。しかし、それはさまざまな世界観を生きる人々に対する真摯な態度といえるだろうか。物質世界について人類学として問うべきことは、またたくさんあるのではないか。

「物質世界は人間にとってどのような条件か」「人間は物質世界をどのように体験し、どのように働きかけるのか」「人間はどのような物質世界に住んでいるのか」という、以上の問いの要にあるもの、それが「物質性」にほかならない。



# 「金網」に囲まれた島・ 沖縄の「音」

呉屋 淳子 民博 機関研究員

## 「金網」の向こう側

アメリカ兵は身分証明書（通称「アイディパス」）無しで沖縄に入ることができる。それとは逆に沖縄に住む人びとは、アイディパスなしで「金網」の向こう側（米国）には行けない。しかし、例外として、運良くアメリカ兵にエスコートしてもらえる場合もある。

「金網」のなかの世界は、本国のアメリカと同じだという。そのため、エスコートされた人は「金網」の向こう側と行き来することで、自分を特別な存在と思いついてしまう。アメリカに行った気分になつてしまうのだろうか。いずれにせよ、そんな「国境」が島には存在している。

## 生活に染みこむ騒音

アメリカ空軍の最大の戦闘機部隊基地である嘉手納基地周辺は、もつとも騒音が酷い地域である。ここでは、昼夜を問わない訓練が繰り返しておこなわれるため、軍用機の「音」は常に沖縄の人びとの生活のなかに入り込んでいる。

残念ながら、こうした基地から吐き出される「音」は、沖縄の人びとの体のなかにも侵入している。基地近隣の



民家の上空を悠々と飛ぶオスプレイ

学校に通う子どもたちは、難聴の疑いがある。たとえば、休み時間のお喋りの声が異常に大きくなつてしまい、話している本人でさえもそのことにほとんど気づいていない。また、ある学校では軍用機の低周波の影響を受け、体調不良で休職・休学を余儀なくされた教員や生徒もいる。このような状況にもかかわらず二〇一二年には、戦

闘機、輸送専用の軍用機に加え、あらたにオスプレイが追加配備された。「金網」の外にいる人びとにとって、あらたな「音」の到来にはなすすべはない。

## 奏でられる音

そんな島でなぜ人びとは暮らせるのだろうか。沖縄の人びとは、喜びにつけ悲しみにつけ、詩を詠み、そして歌を歌ってきた。それは「金網」に囲まれる以前から続いている。こうした沖縄の人びとによって奏でられる「音」は、島が「金網」に囲まれても、沖縄の人びとの心の支えとなってきた。だから、人びとは島を離れないのである。

軍用機から吐き出される「音」に負けない、力強さをもつた沖縄の「音」が、今もどこかで生み出されている。





## 巫女への変心

長坂 康代 民博 外来研究員

新年最初の外出先が神社という人も珍しくないだろう。神社では紅白の衣装の巫女が清らかに、カミのもとで舞っている。じつは日本独自に見える舞、雅楽にも、遠い大陸の伝統が伝えられている。

### ガニマタがウチマタに

神社にかかわる職というと神主がすぐに思い浮かぶだろう。だが、巫女や雅楽を奏でる伶人（楽人）らの奉仕があつて、正月の歳旦祭から始まる年間とおした祭典が成り立っている。

神に仕える巫女は、襦袢の上に白衣を着て、緋袴（ひばかま）を履くのが通例である。とくに緋袴は巫女だけが身に着ける。かつては神主や伶人の袴同様、緋袴にもマチがあつたが、明治時代に女性のために行灯袴（あんどんばかま）が台頭して以降、スカート状が主流になった。

神社の鳥居をくぐって神聖な空気に触れ、手水で清め、拜殿の前で手を合わせる。そして、巫女の装束に着替え、黒髪を後ろで束ねて装飾を施して「変身」する。すると、歩くときいつも振っている腕が身体の前で重ねられ、ガニマタの大股歩きもウチマタの摺り足になる。大口を開けて笑うところでも口を閉じ、言葉遣いも丁寧になり、氏子や参拝者らに微笑みで接するようになる。ふだんは俗世にいて、必要に応じて駆り出される助勤の巫女でも、ひとつひとつ変身を経るなかで「変心」もするのだから、

と舞う姿や、本殿に響く鈴の音、途中で幾度か回るときに長く垂れた裳の裾が床をひきずる様子は、平安貴族を彷彿とさせる。舞姫も、重くて暑い装束を着ていることなど忘れて、その舞の優麗さに酔いしれる。

### 林邑からもたらされた舞

舞としばしばセットになる雅楽は、日本でもっとも古いオーケストラである。ほぼ一〇世紀（平安時代中期）に今日の形になった。「塩梅」（雅楽では「えんばい」と読む）や「打ち合わせ」「八多羅」「野暮」はすべて雅楽用語だが、わたしたちの日常生活にも浸透していることばである。雅楽は、意外と身近なのだ。

雅楽は、神楽や東歌などの「国風歌舞」、「大陸系の楽舞」（器楽と舞）、催馬楽や朗詠の「歌物」に分類される。そのなかでも「大陸系の楽舞」は、中国系の左方（唐楽）と、朝鮮系の右方（高麗楽）に区別される。「蘭陵王」

なんとも不思議なものである。

### 平安貴族を彷彿とさせる

祭典では、巫女は祭祀舞の「豊栄舞」や神楽舞の「浦安の舞」などを、雅楽の演奏に合わせて舞うことがある。「豊栄舞」で巫女は、白衣に緋袴

の装束に、千早という薄い羽織を着て、額に花簪（はなかんざし）をつけ、紅白の布帛（ふはく）をつけた柵（さかき）を手に持つ。神主や楽人の狩衣（かりぎぬ）とは異なり、千早は巫女のみが着る。

「浦安の舞」の本装束として、巫女は通常の装束の上に華やかな十二単様の衣と小忌衣（せきぎぬ）とよばれる唐衣を身にまとい、腰巻のような形の裳を腰に当てて手前で帯を結ぶ。額には花簪をつける。まず扇で、そのあと五色の絹がついた鈴にもちかえて舞うのだが、大きな檜扇（ひのうぎ）を広げてゆったり

（陵王）ともよばれる）は、北斉の武勇才智に長けた蘭陵王が、美形を隠し恐面を被って軍の士気を高め、周の大軍に勝利したという逸話にちなんだ左方の舞曲である。舞人は、竜頭を模した面を被り、緋色の袍の上に襦袢という袖のない貫頭衣を着ける。そして、緋房のついた金色の桴（ばち）を右手に持って舞台にのぼる。「陵王」は、勇壮でリズムミカルかつ絢爛豪華な舞である。これは、林邑（ベトナム中部沿岸部にチャンパ人が二世紀にたてた王国）の僧仏哲（ぶつてつ）によって八世紀にもたらされたといわれる。林邑の楽は「林邑楽」として唐楽に分類される。

二〇一三年、日本とベトナムは「外交関係樹立四〇周年」を迎えた。はるか昔に林邑から伝来した曲や舞が、国風化されて日本の伝統文化となつた。このベトナムの土地から来た楽舞が日本だけで今なお演奏され舞われ続けていることは、神社・雅楽・ベトナム研究にかかわる者として、大変感慨深いものがある。



楽人は、狩衣を着て烏帽子を被る



「豊栄舞」は乙女舞ともいう



平安時代の雰囲気を出す「浦安の舞」の本装束



面と装束を着用すると、陵王が舞人（まいりん）に乗り移る（提供：フジフランソフ）



1月

みんなくウィークエンド・サロン

# 研究者と話そう

■ 14時30分から15時30分

■ 観覧料無料

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。どんだん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

5日  
(日曜日)

話者：加賀谷真梨（国立民族学博物館 機関研究員）  
話題：女に寄り添う女たち——転回する「新しい社会運動」  
会場：本館第3セミナー室

12日  
(日曜日)

話者：森明子（国立民族学博物館 教授）  
話題：産業化と手仕事  
会場：本館展示場（ヨーロッパ展示）

19日  
(日曜日)

話者：鈴木七美（国立民族学博物館 教授）  
話題：21世紀社会のエイジ・フレンドリー・コミュニティ  
会場：本館第3セミナー室

26日  
(日曜日)

話者：藤本透子（国立民族学博物館 助教）  
話題：ウマと暮らす——カザフスタンの草原の村から  
会場：本館展示場（ナビひろば）

## 1年間みんなくに何度でも入館できる「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいあります。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引

◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

## 編集後記

この際、活字でカミングアウトしよう。私はヒノエウマ女である。

「ヒノエウマ生まれだから……」と幼少の頃から言われ、なぜ世間ではそれほど忌み嫌われるのか納得のいく合理的な説明がされないまま、得体の知れない負い目をどこかで感じてきた。仕事で地方に行った際に、「ここではね、結婚市場でランキング最下位ですよ」と言われたこともある。大きなお世話である。

今や希少動物であることを誇りに思うようになったので、知人の前では公言する。すると、「なるほど、がってん」というような反応を得ることが多い。「元気がよい」、「男勝り」というヒノエウマの特性には当てはまるのだろう。仕事上でも私生活においても、積極的であることは良い結果をもたらしてきたので、ヒノエウマの運命には感謝せねばならない。

しかし「男を食い殺す」などと言われては、心穏やかではない。迷信が迷信であるかぎり、私の性命に巻き込まれて家人に災いがもたらされるのでは、という不安が棘のように心に残る。元気のよい女性を抑圧するための社会的な言説だったという説明がつけば、だいぶすつきりするのだが。(山中由里子)

●表紙：銅像 標本番号 H0205121

地域：カメルーン 民族：バムン

次号の予告

特集

## イメージの力

月刊みんなく 2014年1月号

第38巻第1号通巻第436号 2014年1月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

電話 06-6876-2151

発行人 八杉桂穂

編集委員 山中由里子（編集長） 櫻永真佐夫 久保正敏

庄司博史 菅瀬晶子 丹羽典生 野林厚志

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一欒

制作・協力 一般財団法人千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

## 交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。

●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分。

●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんなくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>

